

□ 書評 □

木村謙太郎・石原享介(編)

在宅酸素療法—包括呼吸ケアをめざして

川上義和

(北海道大学医学部第1内科)

在宅酸素療法を享受している患者は最近6万人に達すると見られていて、わが国で最も成功した在宅医療と言われる。成功したという根拠は、科学的・臨床的な根拠に基づいて学会で適応基準が定められ、それに従って保険診療が行われていること、厚生省研究班で長年にわたる実態調査が行われ、その結果明らかになった問題点が解決されつつあること、患者のQOLの改善が明らかで、しかも医療費節減に著しく貢献していること、そして何よりも6万人という大規模な患者数に達したことなどであろう。

他方、適応基準の誤った解釈や在宅酸素療法の呼吸管理における偏った位置づけなど、一部で新しい問題点が生まれつつあるのも否めない。専門施設との緊密な連携という枠はあるものの、当初必要であった施設の認可や届け出の必要は一切なくなり、今後ますます普及が見込まれている在宅酸素療法である。

このような時期にあって、木村謙太郎、石原享介両氏編集による「在宅酸素療法—包括呼吸ケアをめざして」が出版された。両氏は呼吸器の実地診療で長年活躍されている専門家である。実地の専門家が編集・執筆しただけにマニュアルに近い性格を持った書物であ

る。しかし、マニュアルと全く異なるところは、執筆者の思想、哲学ともいえる考え方が中心に据えられていること、コメディカルとの協調や地域社会における普及活動の実例が紹介され、そこからの問題提起があること、社会資源の活用とか人材教育の見地からの提言があることなど、この種の書物では今までにない広い立場からの発言がふんだんに盛り込まれている。むしろ、21世紀に向けての在宅酸素療法、在宅医療に対する提言書といっても過言ではない。

このような内容になったのは、包括呼吸ケアという純医学的な枠を越えた、より社会的な視点を編者が持っておられるからではあるまいか。もしそうであれば、本書の副題はむしろ「社会が取り組む呼吸ケアをめざして」とでもなろうか。

本書の執筆陣は豪華である。編集協力者に看護関係の専門家をおき、執筆には呼吸器専門医は勿論、開業医、理学療法士、保健婦、ソーシャルワーカーなどが当たっている。それだけに、記述には臨場感、親近感、切迫感がある。編者がおそれている“アンバランス”“思い込み”(序文から)はむしろ本書の良き特徴となっており、この種の書物に起きがちな退屈さを避ける清涼剤である。

「在宅医療の現場からの21世紀に向けての提言」と受け止めた優れた啓蒙書である。医療現場のあらゆる職種の方々にお勧めしたい。

(B5 頁168 図101 写真10 表69 定価(本体4,200円+税) 千400 1997 医学書院・刊)